

杜甫と孟雲卿 「三吏三別」における文学観の受容と対峙

富山敦史
(奈良教育大学附属中学校)

Du Fu and Meng Yunqing
In "San li San bie" Acceptance of literary outlook and Confronting

Atsushi TOMIYAMA
(Nara University of Education Junior High School)

要旨：本研究は、社会詩の傑作とされる「三吏三別」が、杜甫と同時代人であった孟雲卿などの尚古派詩人の文学観の影響下に制作された可能性を、杜甫の足跡と作品内容、人間関係に関する資料を手掛かりとして考えた。

キーワード：杜甫 Dufu 孟雲卿 Meng Yunqing 尚古派 Ancient yet group
三吏三別 San li San bie 社会詩 Social poetry

はじめに

盛唐・杜甫（七一〇～七七〇）作の「三吏三別」（「新安吏」「潼關吏」「石壕吏」「新婚別」「垂老別」「無家別」）をまとめている。巻末に全詩掲載）は、社会の矛盾を鋭く見つめた社会詩の傑作として高く評価されている。しかし、その制作の動機や目的については研究は進んでいない。本稿では「三吏三別」詩制作時の杜甫の足跡と人間関係、特に同時代人に高く評価された尚古派の詩人孟雲卿に関する資料を手掛かりとして、「三吏三別」がどのような文学観のもとで作られたものかを考えたい。

1. 研究方法

杜甫の詩文の底本は原則として『杜工部集』（『杜工部集』（一・二）影宋本 臺灣學生書局 1957）に依り、必要に応じて、『杜詩詳註』（清・仇兆鰲 中華書局 1979）を参照した。また、孟雲卿や元結など尚古派の詩文は、「唐人選唐詩」や全唐詩から引用した。研究の方法は、「三吏三別」制作時の杜甫の足跡と尚古派の詩との比較、杜甫と尚古派の人間関係と文学観の相違の観点から考察をした。

2. 杜甫の足取り

「三吏三別」の制作時期については、『杜詩詳註』や『杜甫年譜』¹⁾ など、ほとんどの注釈書²⁾ が、乾元二

年（七五九）に、洛陽・華州間の見聞に基づいて作られたとしている。しかし、各詩には内容から見て状況の違いや作者の意識の違いが感じられる。このことは、各詩が一時期に作られたものではなく、様々な状況を経た結果作られたものであることを示している。そこで、これらの詩がどのような状況の下で作られたのか、乾元元年（七五八）冬から乾元二年（七五九）春までの杜甫の華州・洛陽間の足跡を基にして、制作時期を検討しながら考察することにする。

乾元元年（七五八）冬、華州司功參軍の職にあった杜甫は、所用で洛陽に赴き、翌乾元二年（七五九）春、華州に戻った。この間の杜甫の足跡については諸家の究明にも拘わらず不明な箇所が多いが、残された杜甫の詩を資料にして推論してみたい。

乾元元年（七五八）冬から乾元二年（七五九）春までの間に制作されたと思われる作品は『杜甫年譜』に依れば、

「冬末以事之東都湖城東遇孟雲卿復歸劉顥宅宿宴
飲散因為醉歌」
「閔鄉姜七少府設醴戲贈長歌」
「戲贈閔鄉秦少府短歌」
「李鄠縣丈人胡馬行」
「觀兵」
「路逢襄陽楊少府入城戲呈楊員外綰」
「憶弟」二首
「得舍弟消息」
「不歸」
「新安吏」

「潼關吏」

「石壕吏」

「新婚別」

「垂老別」

「無家別」

「贈衛八處士」

(傍点筆者)

とある。私がここで注目したいのは、詩題中に表れる土地名(傍点)が、華州・洛陽間においてどのように地理的に位置づけられるかということである。華州・洛陽間の地名を簡単に地図に従って並べると、

華州

↓↑

潼關

↓↑

閿鄉

↓↑

湖城

↓↑

石壕

↓↑

新安

↓↑

洛陽

となり、これは黄河に沿った街道上に位置している。こうしてみると「三吏」が単純に往路に従って作られたとすると「潼關吏」→「石壕吏」→「新安吏」となるべきであり、復路だとこの逆になるべきである。しかし、『杜工部集』では、「新安吏」→「潼關吏」→「石壕吏」の順に収められている。これについて鈴木修次³⁾は、

連作としての劇的効果を考えるならば、やはり『杜工部集』の排列のごとく、「新安吏」・「潼關吏」・「石壕吏」の順でなければならない。そうしてこそ始めて、詩人の発言の姿勢の変化と深まりとが見られるのである。詩人の眼が、しだいに体制から離れてゆくそのところに、この連作の意味があるのである。

と、「連作としての劇的効果をねらったもの」として「三吏」の排列をとらえ、その根拠として「詩人の発言の姿勢の変化と深まり」とを挙げているが、「新安吏」と「潼關吏」とを官吏としての杜甫の発言の立場の違い、うたわれる兵士の状況の違いという視点に立って比べてみるならば、「新安吏」の「況乃……僕射如父兄」が緊張感を欠く原因になるとしても、「天地終無情」に見られるように「新安吏」の方にむしろ厳しい作者の眼が感じられる。ここにおいて私は、「新安吏」が「潼關吏」より後に作られたのではないかと推測する。こう考えると「潼關吏」が、乾元二年(七五九)華州への復路、潼關で作られた可能性は極めて低くなり、洛陽帰郷後の作とは考えにくくなる。

次に往路を考えてみる。「潼關吏」が、乾元元年(七五八)洛陽への往路、潼關で作られたと仮定して、次のポイント閿郷で作られたと思われる「閿郷姜七少府設贈戲贈長歌」と「戲贈閿郷秦少府短歌」の内容を比べてみると、二首とも題に「戲」と冠している⁴⁾

ものの、「東歸貧路自覺難」(「閿郷姜七少府設贈戲贈長歌」)や「今日時清兩京道、相逢苦覺人情好」(「戲贈閿郷秦少府短歌」)の句に見られるように、帰郷が強く意識されており、その街道でおそらく出会ったと思われる兵士や避難民の状況を認識する視点に欠けている。また、制作場所は特定できないが、「李鄠縣丈人胡馬行」にも「洛陽大道時再清、累日喜得俱東行」とあり、帰郷する喜びのために周囲の状況を正しく認識することができなかったのではないかと考えられる。ここには「潼關吏」に見られたようなうたう対象に対する積極的な姿勢は感じられない。以上のことから「潼關吏」がこれらの作品よりも前に作られたとは考えられない。このように見てくると「潼關吏」が必ずしも潼關で作られたものであるとは言い難くなる。では一体「潼關吏」はどこで作られ、またその視点は何によって杜甫にもたらされたのか。私はここで「潼關吏」が閿郷以降、洛陽に帰るまでの間に制作されたものと措定し、推論を進めてみたい。

さて、次のポイント湖城において、杜甫は「冬末以事之東都湖城東遇孟雲卿復歸劉顥宅宿宴飲散因為醉歌」の詩題に見えるように孟雲卿(七二五?~?)に出会っている。高木正一は『杜甫』⁵⁾の中で、この旅行中に杜甫の文学に関して看過できないものがあつたとして、

洛陽に向かう旅の途中、湖城、すなわちいまの河南省閿郷県の東で、孟雲卿と呼ばれる詩人に出会ったことが、その一つである。この人物は、当時尚古派詩人の健将として知られていた元結と同郷であり、それと詩論をひとしくする詩人であった。(中略)年こそ杜甫よりは十三歳ほど若かったが、すでにその詩名は相当世に知れわたっていた。旅の道中、たまたまこの詩人とめぐりあつた杜甫は、うち連れて劉顥の宅に一夜を明かし、宴席をともにしながら、文学についての議論をたたかわした。晩年彼が夔州で作った詩「閿を解く」第五首に、「一飯未だ曾て俗客を留めず、数編今見る古人の詩」と追憶賞賛するごとく、彼はこの詩人の高雅な人柄と、古人のおもかげを伝えるその詩風を高く評価し、ともに詩論を語るにたる人物と考えたようである。

と述べ、尚古派詩人孟雲卿との出会いが杜甫の文学に影響を与えたことを指摘している。では、いったい孟雲卿の何に影響を受けたのであろうか。高木も指摘するように、孟雲卿は当時尚古派詩人として有名であつた。「讀書破萬卷、下筆如有神、賦料揚雄敵、詩看子

建親]（「奉贈韋左丞丈二十二韻」）や「往者十四五、出遊翰墨場、斯文崔魏徒、以我似班揚」（「壯遊」）に見えるように、若い頃から文学に関心の高かった杜甫は、当然孟雲卿の作品や文学論に興味を持っており、今回の出会いで、その人となりと作品を目の当たりにして共感し、その文学論に大いに影響を受けたのではないだろうか。さらに尚古派の元結にも話題が及び、彼の作品や文学論にも接触する機会を得たのではないだろうか。杜甫と孟雲卿・元結との関係については、伊藤正文「杜甫と元結・『篋中集』の詩人たち」⁶⁾に詳しい考察がある。これに依れば、杜甫は『篋中集』（乾元三年（七六〇）元結編）に収録されている尚古派詩人たちと個人的に少なからず関係があり、その文学論に大いに共感していたこととされる。さらに伊藤は、杜甫の「三吏三別」と元結との関係について次のように述べている。

「三吏」「三別」が元結の「系樂府」十二首（天寶十載の作）の影響下にあると言い切ることにはできないが、制作時期の前後と、テーマの関連性には十分注意する必要がある。

ここで、私は、『篋中集』⁷⁾が乾元三年（七六〇）元結によって編纂されたことに注目して一つの仮説を提示したい。それは、杜甫が湖城の東で孟雲卿と出会い、後年夔州での「李陵蘇武是我師、孟子論文更不疑」（「解悶」十二首其五）にも示されるように、尚古派の文学論に親しく接触し、大いに共感し、自身の文学論を再確認する機会を得たのではないかと、さらに自身もこの尚古派に繋がり、自己の理想の実現を果さんがために「三吏三別」という一連の社会詩の制作を意図したのではないかとということである。このような状況の下、「潼關吏」は乾元元年（七五八）湖城東での孟雲卿との出会いの後、洛陽に到るまでの間に、彼からもたらされた尚古派の視点によって制作されたものであると推測したい。

3. 孟雲卿とは何者か

杜甫は、この左拾遺時代から晩年に至るまで孟雲卿と直接的な関係を持っていた。

3.1. 『唐才子傳』の中の孟雲卿

孟雲卿の伝記については見るべき資料は極めて少ない。まず、元・辛文房の『唐才子傳』⁸⁾に依って孟雲卿の人となりを見る。

雲卿、關西人。天寶年間不第。氣頗難平、志亦高尚。懷嘉遯之節。與薛據相友善。嘗流寓荊州。杜工部多有與雲卿贈答之作。甚愛重之。工詩。其體祖述沈千運、漁獵陳拾遺。詞氣傷怨。雖然模效、齋得升堂。猶未入室。當時古調、無出其右。一時之英也。如虎豹不相食。哀哉人食人。又朝亦常饑、暮亦常饑。飄飄萬里餘。貧賤多是非。少年莫遠遊。

遠遊多不歸。皆爲當代推服。韋應物過黃陵、遇孟九贈詩云、高文激頰波、四海靡不傳、西施且一笑、衆女安得極。其才名於此可見矣。仕終校書郎。○雲卿稟通濟之才、淪吞獵之俗。栖栖南北、苦無所遇。何生之不辰。身處江湖、心存魏闕。猶杞國之人、憂天墜相率而逃者、匹夫之志、亦可念矣。

（傍点筆者 以下同様）

と、傍点に見られるとおり、詩に巧みであり、古調においては当時彼の右に出る者はなく、皆に推服されていた。また、杜甫が彼を重んじ贈答の作があると述べられている。

3.2. 元結「送孟校書往南海」序文の中の孟雲卿

次に、元結の「送孟校書往南海」の序⁹⁾を見る。

平昌孟雲卿、與元次山同州里、以詞學相友、幾二十年。次山今罷守春陵、雲卿始典校芸閣、於戲、材業次山不如雲卿、詞賦次山不如雲卿、通和次山不如雲卿、在次山又詔然求進者也。誰言時命、吾欲聽之、次山今且未老、雲卿少次山六七歲、雲卿聲名滿天下、知己在朝廷、及次山之年、雲卿何事不可至……（以下略）

とあり、元結は孟雲卿を絶賛している。この序から元結と孟雲卿が同郷であり、詩友として長いつきあいがあったことが分かる。また孟雲卿は元結より六、七歳若いという。元結の生年が開元七年（七一九）であるので、開元十四年（七二五）頃の生まれであることが分かる。杜甫からすれば十三歳ほど年下である。

3.3. 杜詩の中の孟雲卿

杜甫が孟雲卿を歌った詩は、

- I 「酬孟雲卿」 乾元元年（七五八）
- II 「冬末以事之東都湖城東遇孟雲卿復歸劉顥宅宿宴飲散因為醉歌」 乾元元年（七五八）
- III 「解悶」十二首其五 大曆二年（七六七）
- IV 「別崔暹寄薛據孟雲卿」 大曆二年（七六七）

の四首が現存するが、孟雲卿が杜甫を歌ったものは現存する十七首（『全唐詩』）中にはない。乾元元年の二首を見てみよう。

I 「酬孟雲卿」 乾元元年（七五八）作

- 01 樂極傷頭白、樂極まりて頭の白さを傷み、
- 02 更長愛燭紅。更長燭の紅なるを愛す。
- 03 相逢難袞袞、相逢ふこと袞袞たり難く、
- 04 告別莫匆匆。告別匆匆たる莫かれ。
- 05 但恐天河落、但だ恐る天河の落ちむことを、
- 06 寧辭酒醜空。寧ぞ辭せむ酒醜の空しきを。
- 07 明朝牽世務、明朝世務に牽かれて、
- 08 揮淚各西東。涙を揮ひて各の西東ならむ。

乾元元年（七五八）六月、左拾遺から華州司功參軍事として赴任するため、長安を去る際の送別の宴において孟雲卿に対して返答として送られた詩である。心

許せる友との別れを惜しむ心情が溢れ出ている。

Ⅱ「冬末以事之東湖城東遇孟雲卿復歸劉顥宅宿宴
飲散因為醉歌」乾元元年（七五八）作

- 01 疾風吹塵暗河縣，疾風塵を吹きて河縣に暗し、
- 02 行子隔手不相見。行子手を隔てて相見えず。
- 03 湖城城南一開眼，湖城の城南一たび開眼す、
- 04 駐馬偶識雲卿面。馬を駐めて偶たま識る雲卿が面。
- 05 況非劉顥為地主，況んや劉顥の地主為るに非ずや、
- 06 懶回鞭轡成高宴。鞭轡を回らせて高宴を成すに懶し。
- 07 劉侯歎我攜客來，劉侯我が客を攜へて來るを歎じ、
- 08 置酒張燈促華饌。酒を置き燈を張り華饌を促す。
- 09 且將款曲終今夕，且つ將に款曲をもって今夕を終えむとす、
- 10 休語艱難尚酣戰。語るを休めよ艱難尚ほ酣戰。
- 11 照室紅爐促曙光，室を照らす紅爐曙光を促し、
- 12 縈窗素月垂文練。窗に縈たる素月は文練に垂る。
- 13 天開地裂長安陌，天開き地裂く長安の陌、
- 14 寒盡春生洛陽殿。寒盡き春生ず洛陽の殿。
- 15 豈知驅車復同軌，豈に車を驅りて同軌に復せんことを知る、
- 16 可惜刻漏隨更箭。惜しむ可し刻漏更箭に隨ふを。
- 17 人生會合不可常，人生會合常にすべからず、
- 18 庭樹雞鳴淚如綫。庭樹雞鳴きて涙綫の如し。

詩題にあるように乾元元年（七五八）の冬、華州司功參軍事在職中の杜甫が用事で東都（洛陽）に向かう途中、湖城の東で孟雲卿に出会い、知り合いの劉顥宅に戻り、そこで酒宴をした後、別れを惜しんで作った歌である。地方官へ左遷された杜甫にとって心許せる孟雲卿との再会は、何物にも代え難い貴重な時間であっただろう。おそらくここで二人はお互いの文学作品について大いに語り合ったのだろう。また、尚古派の蘇源明や元結の消息についても話題が及んだのかも知れない。

3. 4. 元結編『篋中集』の中の孟雲卿

『篋中集』が序文のとおり、乾元三年（七六〇）に編纂された¹⁰⁾とすれば、ここに収録された孟雲卿の作品を湖城の東で杜甫が孟雲卿と出会った時に眼にしたという可能性が考えられる。そこで『篋中集』所収の孟雲卿の詩五首¹¹⁾を見ることにする。

「古樂府挽歌」

- 01 草草門巷喧，草草たり門巷の喧、
- 02 塗車儼成位。塗車儼として位を成す。
- 03 冥冥何得盡，冥冥何ぞ盡くすを得む、
- 04 戴我生人意。我が生人意を戴く。
- 05 北邙路非遙，北邙の路遙かに非ず、
- 06 此別終天地。此に終に天地に別る。
- 07 臨穴類撫棺，穴に臨みて類りに棺を撫で、
- 08 至哀反無淚。哀しみに至りて反りて涙無からむ
- 09 爾形未衰老，爾が形未だ衰老せず、
- 10 爾息猶童稚。爾が息猶ほ童稚のごとし。

- 11 骨肉安可離，骨肉安くんぞ離るべけんや、
- 12 皇天若容易。皇天若ふこと容易なり。
- 13 房帷即靈帳，房帷は即ち靈帳、
- 14 庭宇為哀次。庭宇は哀次を為す。
- 15 薤露歌若斯，薤露の歌斯くの若し、
- 16 人生盡如寄。人生盡く寄するが如し。

「今別離」

- 01 結髮生別離，結髮生きて別離す、
- 02 相思復相保。相ひ思ふこと復た相ひ保つ。
- 03 如何日已遠，如何ぞ日已に遠く、
- 04 五變中庭草。五たび變ず中庭の草。
- 05 渺渺天海途，渺渺たり天海の途、
- 06 悠悠吳江島。悠悠たり吳江の島。
- 07 但恐不出門，但だ恐る門を出でざるを、
- 08 出門無遠道。門を出づれば、遠道無からむ。
- 09 遠道行既難，遠道行くも既に難く、
- 10 家貧衣裳單。家貧にして衣裳單なり。
- 11 巖風吹積雪，巖風積雪に吹き、
- 12 晨起鼻何酸。晨起鼻何ぞ酸たる。
- 13 人生為有志，人生志有るが爲に、
- 14 豈不懷所安。豈に安んずる所を懷かざらむや。
- 15 分明天上日，分明たり天上の日、
- 16 生死誓同觀。生死共に觀んことを誓ふ。

「悲哉行」

- 01 孤兒去慈親，孤兒慈親を去り、
- 02 遠客喪主人。遠客主人を喪ふ。
- 03 莫吟辛苦曲，辛苦の曲を吟じる莫かれ、
- 04 此曲誰忍聞。此の曲誰か聞くを忍びむ。
- 05 可聞不可見，聞くべし見るべからず、
- 06 去去無形迹。去去形迹無し。
- 07 行人念前程，行人全程を念ひ、
- 08 不待參辰沒。參辰の沒するを待たず。
- 09 朝亦常苦飢，朝に亦た常に飢へに苦しみ、
- 10 暮亦常苦飢。暮に亦た常に飢へに苦しむ。
- 11 飄飄萬餘里，飄飄たり萬餘の里、
- 12 貧賤多是非。貧賤是非多し。
- 13 少年莫遠遊，少年遠遊する莫かれ、
- 14 遠遊多不歸。遠遊すれば多く歸らず。

「古別離」

- 01 朝日上高臺，朝日高臺に上がり、
- 02 離人愁秋草。離人秋草を愁ふ。
- 03 如見萬里人，萬里の人を見る如く、
- 04 不見萬里道。見えず萬里の道。
- 05 含酸欲誰訴，酸を含みて誰か訴せんと欲す、
- 06 轉轉傷懷抱。轉轉として懷抱を傷む。
- 07 君行本迢遠，君行くは本より迢遠にして、
- 08 苦樂良誰保。苦樂良く誰か保たむ。

- 09 宿昔夢同衾、宿昔夢に衾を同じうし、
 10 心憂夢顛倒。憂心夢顛倒す。
 11 結髮年已遲、結髮年已に遅くし、
 12 征行去何早。征行去くこと何ぞ早き。
 13 寒暄有時謝、寒暄時有りて謝し、
 14 憔悴亦難好。憔悴亦た難し好し。
 15 人皆弯年壽、人皆年壽を弯し、
 16 死者何曾老。死者何ぞ曾老。
 17 少壯無見期、少壯見る期無く、
 18 水深風浩浩。水深くして風浩浩たり。

「傷懷贈故人」

- 01 稍稍晨鳥翔、稍稍たる晨鳥翔け、
 02 淅淅草上霜。淅淅たり草上の霜。
 03 人生早艱苦、人生早に艱苦、
 04 壽命恐不長。壽命の長からざるを恐る。
 05 二十學已成、二十にして學已に成り、
 06 三十名不彰。三十にして名彰はれず。
 07 豈無同門友、豈に同門の友無からむや、
 08 貴賤易中腸。貴賤中腸し易し。
 09 驅馬行萬里、馬を驅りて萬里を行く、
 10 悠悠過帝鄉。悠悠として帝郷を過ぐ。
 11 幸因絃歌末、幸ひに絃歌の末に因りて、
 12 得上君子堂。君子の堂に上るを得る。
 13 衆樂互喧奏、衆樂互いに喧奏し、
 14 獨子備笙簧。獨子笙簧を備ふ。
 15 坐中無知音、坐中知音無く、
 16 安得神揚揚。安くんぞ神の揚揚たるを得む。
 17 願因高風起、願はくば高風の起くるに因りて、
 18 上感白日光。上白日の光を感じむ。

五首共に五言古詩であり、古の趣を伝え、人生の悲哀を静かに見つめている作品群といえよう。テーマに関しては五首中「傷懷贈故人」を除く四首が「別れ」を扱い、人生との別れ、夫婦の別れ、肉親との別れが、いずれもうたわれる対象の立場に立ってうたわれている。これらは「三吏三別」のテーマとの関連性が認められる。具体的に示すと「結髮生別離」（「今別離」）と「結髮爲妻子、席不煖君床、暮婚晨告別」（「新婚別」）、「相思復相保」「分明天上日、生死誓同觀」（「今別離」）と「人事多錯迕、與君永相望」（「新婚別」）、「家貧衣裳單」（「今別離」）と「歲暮衣裳單」（「垂老別」）のように、テーマや詩語において類似性、関連性が認められる（傍点筆者）。

3.5. 「三吏三別」詩と元結の詩との関連性

次に二人の間で当然話題に上ったと思われる元結の詩¹²⁾を見ることにする。「系樂府」十二首（天寶十載（七五一）作）は、序と「思太古」「隴上歎」「頌東夷」「賤士吟」「欸乃曲」「貧婦吟」「去郷悲」「壽翁興」「農

臣怨」「謝大龜」「古遺歎」「下客謠」からなる。このうち「貧婦吟」「去郷悲」の二首に、伊藤正文¹³⁾も指摘するように「三吏三別」とのテーマの関連性が認められる。

「貧婦詞」

- 01 誰知苦貧夫、誰か知らむ苦はだ貧しき夫の、
 02 家有愁怨妻。家に愁怨の妻有るを
 03 請君聽其詞、請う君其の詞を聽きたまはば、
 04 能不為酸嘶。能く為に酸嘶せざらむや
 05 所憐抱中兒、憐れむ所は抱中の兒の、
 06 不如山下麝。山下の麝に如かざるを
 07 空念庭前地、空しく庭前の地の、
 08 化爲人吏蹊。化して人吏の蹊と爲るを念ふ
 09 出門望山澤、門を出でて山澤を望み、
 10 回顧心復迷。回顧するに心復た迷ふ
 11 何時見府主、何れの時か府主に見え、
 12 長跪向之啼。長跪して之に向ひて啼かむ

「貧婦吟」の貧婦が嘆きの詞を述べる構成は、「石壕吏」の老婦の役人に対して詞を述べるという構成に通じる。また、「請君聽其詞」（「貧婦吟」）と「聽婦前致詞」（「石壕吏」）、「所憐抱中兒」（「貧婦吟」）と「惟有乳下孫」（「石壕吏」）のようにどちらも乳児とその母がうたわれている。さらに、「化爲人吏蹊」（「貧婦吟」）と「有吏夜捉人」（「石壕吏」）のように、徴兵、徴税に頻繁にやってくる無情な役人の姿を彷彿とさせる。

「去郷悲」

- 01 躊躕古塞關、躊躕す古の塞關、
 02 悲歌爲誰長。悲歌 誰が爲にか長き
 03 日行見孤老、日行して孤と老の、
 04 羸弱相提將。羸弱相ひ提將するを見ゆ
 05 聞其呼怨聲、其の呼怨の聲を聞き、
 06 聞聲問其方。聲を聞きて其の方を問ふ
 07 方言無患苦、方に言う患苦無ければ、
 08 豈棄父母郷。豈に父母の郷を棄てむや
 09 非不見其心、其の心の仁惠誠に
 10 仁惠誠所望。望む所なるを見はさざるに非ず
 11 念之何可說、之を念へば何の説ふべき、
 12 獨立爲悽傷。獨り立ち爲に悽傷す

「去郷悲」は、題が示すように「故郷を去る悲しみ」がうたわれている。これは、「垂老別」「無家別」のテーマに通じる。「方言無患苦、豈棄父母郷」（「去郷悲」）と「何郷爲樂土、安敢尚盤桓、棄絕蓬室居、塌然摧肺肝」（「垂老別」）、「近行止一身、遠去終轉迷、家郷既盪盡、遠近理亦齊」（「無家別」）のように、患苦、出征などの大きな力によって無理やり故郷を離れていかなければならない様子が描かれている。さらに「念之何可說、獨立爲悽傷」（「去郷悲」）の故郷を去る者に対して、何の言葉掛けもできず、心を痛めて独り立ちつくす聞き手の姿は、「石壕吏」の「天明登前途、獨與老翁別」という投宿者の姿に重なっていく。

以上見てきたように、杜甫が目にし耳にしたと思われる孟雲卿・元結の作品には、「三吏三別」とテーマや表現、詩語において多くの類似性、関連性が認められた。ここには、尚古派の『詩経』・古楽府の精神に立ち返り、民衆の立場で詩をうたうという視点が大きく示されていたといえよう。

4. 尚古派の文学観と人脈（人間関係）

では、どうして杜甫が年下の孟雲卿らの影響を受けることになったのか。尚古派の文学観と人脈（人間関係）という二つの側面から考えてみたい。

4.1. 尚古派の文学観

孟雲卿ら尚古派の文学観は、中澤希男¹⁴⁾が明らかにしたように『篋中集』序文の中で、文学を「浮華な時俗を改め、往古の淳風を再びもたらすための具」として考えていた。いっぽう杜甫は、「文章一小技、於道未爲尊」（「貽華陽柳少府」）、「名豈文章著、官應老病休」（「旅夜書懷」）に示されるように、文学それ自体を絶対視するのではなく、詩業を媒介として政治に参加し、「致君堯舜上、再使風俗淳」（「奉贈韋左丞丈二十二韻」）という自己の理想を実現するための手段として文学を考えていた。つまり、孟雲卿ら尚古派の文学観は、杜甫の理想を実現するのに最もふさわしい考え方であるといえる。房琯弁護事件以来政争に巻き込まれ、左遷の憂き目に遭い、中央に戻る望みを無くしていた杜甫は、状況が許せば故郷洛陽に引き上げようと思案していたものと思われる。そんな状況の中で、尚古派の有名な詩人孟雲卿に出会い、その文学論に親しく接触し、同じ理想を目指す者として大いに共感し、新たな中央官界復帰の可能性を見だし、その影響を受けたものと考えられる。

4.2. 尚古派の人脈（人間関係）

伊藤正文¹⁵⁾の研究から、杜甫は当時中央官界で活躍していた尚古派詩人と少なからず直接的あるいは間接的な関係を持っていたことが分かる。蘇源明（？～七六四）¹⁶⁾とは、長安時代（天寶十三載頃）から、賈至（七一八～七七二）、孟雲卿（七二五～？）¹⁷⁾とは左拾遺時代から直接的な関係を持っていた。また、元結（七一九～七七二）とは、天寶六載（七四七）玄宗が広く天下の士を求めた際¹⁸⁾、共に長安で試験に応じた時に、あるいはその翌年両者ともに長安にいた時に、互いに相手の存在を知った可能性が考えられる。顔真卿（七〇九～七八五）は、房琯弁護事件の際に三司の一人として杜甫を取り調べている。¹⁹⁾この時顔真卿は、杜甫を軽率だとしながらも諫官の態度を持った人物として認識していたかも知れない。次に尚古派詩人たちの関係を見る。蘇源明は「源明雅に杜甫、鄭

虔を善しとし、其の最も稱する者は元結、梁肅なり」（『新唐書』卷二〇二「蘇源明傳」²⁰⁾）のように、元結を最も称え、乾元二年（七五九）には、乱のために隠棲していた彼を肅宗に推薦し献策を行わせ、官僚としての活躍の場を提供した。元結と孟雲卿は先述の「送孟校書往南海」の序から明らかなように、同郷人であり、詩友であった。元結と顔真卿は、顔真卿によって元結の墓碑銘²¹⁾が書かれ、元結の作品²²⁾が顔真卿の書によって石に刻まれるなど深い関係にあった。このように尚古派の詩人たちには相互に密接な関係があり、林田愼之助²³⁾が述べるように、彼らは独自の文学集団を形成し、その人脈の中で自分たちの文学論を継承していったものと考えられる。また、彼らは文学論の継承に留まらず、同時に彼らの理想を実現するため積極的に政治に関わり、華々しい実績を上げていった。²⁴⁾

尚古派と少なからず関係を持つ杜甫は、彼らに繋がることにより、再び中央官界復帰の可能性を意図したものと考えられる。

杜甫は湖城東での孟雲卿との出会いによって尚古派の文学観を自分の文学観と照合する機会を持ち、尚古派の文学観を自己の理想を実現するのに最もふさわしい考え方であると認識する。さらに、尚古派に属する新興科挙官僚の中央官界での華々しい活躍に際し、自らもこの尚古派に繋がって中央官界に復帰し、理想の実現を果さんがために、尚古派の尊ぶ『詩経』・古楽府の精神に立ち返った社会詩の作成を意図したのだろう。ここにおいて、湖城東での孟雲卿との出会いは、こうした意味での社会詩「三吏三別」制作の動機となったと考えられる。

5. 「三吏三別」制作後の杜甫

本章では、上述のような意図のもとに制作された「三吏三別」が、その後の杜甫に対してどのような意味を持つことになったのかを考えてみる。

5.1. 「棄官」と「三吏三別」

乾元二年（七五九）春、杜甫は華州に帰還する。夏、「夏日歎」にうたわれるように華州は「飛鳥熱に苦しみて死す」ほどの日照りが続き、旱魃にみまわれ付近一帯は飢饉となった。このような状況下、秋、杜甫は華州司功參軍の職を棄て、家族と共に秦州に旅立った。通説では飢饉による食糧不足のため、華州では家族を養うことができなくなったことを棄官の理由として挙げているが、果たしてそのみであろうか。私は先に「三吏三別」が、自己の理想実現の手段として制作されたのではないかと述べた。官職を求めたために「三吏三別」が制作されたのだとすれば、今回の棄官はいったいどのような意味を持つのかだろうか。第一

章で述べたように、華州司功參軍事の職は、杜甫にとっては満足できるものではなかった。その最大の理由としては、彼の理想を実現するにはほど遠い官職であったことと、中央官界復歸の望みが全く絶たれた状況であったことが挙げられる。しかし、湖城東での孟雲卿との出会いによって中央官界復歸への新たな可能性が見出され、「三吏三別」を作った後の杜甫にとって、華州司功參軍事の職は、もはや食糧を得る手段としてしか考えられていなかったのではないか。こうした中での飢饉による食糧不足は、彼に棄官を決心させるだけの十分な条件であったと思われる。

棄官の理由について、鈴木修次²⁵⁾は「三吏三別」中の体制への反抗とも受け取められかねない発言が、官吏として許される限度を越えたものとされて罷免されたと述べ、さらに、

かれはこのとき、ふたたび仕官はするまいと決意したにちがいない。生活に苦勞しながらも、「形役に拘せられ」ることのない自由な民として、自然の中に没入しようとした。(傍点筆者)

と、ついに官僚生活に訣別し、以後放浪詩人として旅立っていったと述べている。「三吏三別」中の厳しい言葉が筆禍になったという可能性は、杜甫が影響を受けた孟雲卿や元結の詩には「三吏三別」に見られるような体制そのものの存在を根本から問うような立ち上がった発言はなかったという観点から見れば否定できない。しかし、官僚生活に訣別し放浪の詩人として旅立ったということは、杜甫がその後の生活の場を嘗ての友人たちがいる西の地方に求めたということからも考え難い。安東俊六²⁶⁾が、

私は、杜甫が西の方に向かった意図は、房琯の事に連坐して流された嚴武や劉秩、あるいは、庇護を求め、その推挙を待つことにあったと考える。と指摘するように、杜甫が官僚生活に訣別したとは考えられない。

以上のことから「棄官」に際して「三吏三別」が担った意味を考えてみると、「三吏三別」は尚古派に対する賛同の意思表示であり、杜甫はその反応を頼みの綱として、かねてより意に染まなかった華州司功參軍事の職を飢饉による食糧難という状況にあたって抛ったものと私は考える。そうして、秦州へと旅立ったが、「秦州雜詩」二十首其四の「萬方聲一概、吾道竟之何」に象徴的に示されるように、杜甫はこれからの生き方に対して大いに苦悩し、不安を抱いていたことが窺える。尚古派に繋がることを頼みとして「棄官」の道を選んだが、次の仕官は必ずしも実現するわけではなく、家族を抱え、親類・友人を頼りに、秦州、同谷、そして成都へと移動する杜甫の胸中には常に不安と迷いが渦巻いていたと考えられる。杜甫に尚古派の反応が伝えられるには、もうしばらく時を要した。

5.2. 尚古派の反応

乾元三年(七六〇)、元結によって尚古派詩人七人の詩二十四首を集めた『篋中集』が編纂された。今まで見てきたように、文学観や人間関係においても受け入れられてしかるべき条件にありながら、杜甫の詩は『篋中集』には一首も選ばれなかった。この事実に対して杜甫はどのような態度を取ったのだろうか。川北泰彦²⁷⁾は、

然らば杜甫自身はこれらに対して如何なる態度をとったかといえば、従来杜甫に於ける詩論を論ずるに当たって「偶題」とともによく引用されてきた「戲為六絶句」をもってそれに答えた。この詩は単に詩論を定着させる材料として考えられるのではなく、これら客観的情勢に対する杜甫の懸命な自己主張の詩でもあった。(中略)この「戲為六絶句」の最も近い制作動機として私は「篋中集」を考えている。(中略)この最も杜甫の詩が受け入れられて然るべき詩集としての「篋中集」に編録されていないという点からも、このような推測は許されるのではないだろうか。

と、杜甫は「戲為六絶句」をもって、彼を受け入れない尚古派に対して精一杯の自己主張をしたとするが、果たしてそれだけだったのだろうか。

おわりに

5章にわたって、杜甫の「三吏三別」がどのような状況の中で制作されたものであるかについて考えてみた。「三吏三別」は単に社会詩の傑作として評価されるだけでなく、その制作の背景や目的には、政治を志す士大夫階級としての使命と詩人としての自負が込められた作品であった。杜甫が自己と文学観を共にすると信じた尚古派に繋がって中央官界に復歸し、自己の理想実現を果さんがために制作を意図した社会詩「三吏三別」は、彼の意図とは裏腹にかえって自身の文壇における孤立状態を深く認識させる結果となったのであった。「三吏三別」は、爾後の杜甫の生涯を考える上で極めて重要な位置を占めている。「棄官」が自発的であったにせよ、なかったにせよ、官界から退くということは杜甫の政治的文学的理想の実現という観点から考えると大きな後退であった。理想と現実のギャップを杜甫はどのようにとらえ、どのように生きたのか。

実は、杜甫が成都を去り、夔州から湖南へと漂泊する最晩年の六年間は、杜甫総詩数一四一八首の43.8%に及ぶ六二一首が作られた時期であり、とりわけ五言近体詩の多作の時期でもあった²⁸⁾。生涯にわたる杜詩五言詩の制作総数一〇一三首のうち四四七首(44.2%)がこの時期に作られた。詩型別に挙げると、五言古詩九六首、五言絶句一五首、五言律詩二六九首、五言排律六七首である。特に多作の五言近

体詩は周知のごとく、科擧の詩帖詩にも用いられる公的な詩型である。そして、五言近体詩の中には、詩律の規格に外れる破格の拗体詩も含まれている。

さらにこの時期に杜甫は再び、尚古派の詩人たちに対して詩を作っている。七六六年には、「解悶十二首」（七絶）で薛璩（其四）、孟雲卿（其五）に。七六七年には、「別崔湜因寄薛璩孟雲卿」で薛璩・孟雲卿に、「可歎」（七古）で王季友²⁹⁾に、「寄薛三郎中璩」（五古）で薛璩に、「同元使君春陵行」（五古）では元結に対して、それぞれ詩を作っている。杜甫が詩を手紙がわりに、また手紙に添えて送ったことはよく知られているが、これらの詩に新作の詩を添えて送っていた可能性は十分に考えられる。このことは何を意味するのであろうか。

私は、この時期の五言近体詩多作が、杜甫が嚴武の上奏により授与された檢校尚書工部員外郎が虚銜（名目的に付与された京官）ではなく、実務官として都に赴き中央官職（郎官）就任実現を果たすべく、中央官界に関わる人々に繋がるための手段であることを述べた³⁰⁾が、もうひとつ、拗体五言律詩を含む五言詩多作の試みも、拗体七言律詩と同様に、詩人としての自覚に基づいた新しい自己の文学観を他の詩人に示すための作品、つまり、近体五律に古体詩の要素を加味する新たな詩律の可能性を尚古派に示すものであったと考えられるのではないだろうか。

註

- 1) 『杜甫年譜』四川省文史研究館編 四川人民出版社 一九五八年十二月。なお、成立年代は原則としてこれに従った。
- 2) 『杜甫年譜』、『杜詩詳註』、『讀杜心解』、『錢注杜詩』など主な注釈書は、六首とも乾元二年（七五九）作としている。
- 3) 「杜甫「三吏三別」の特異性」『唐代詩人論』鈴木修次 鳳出版 一九七三年四月
- 4) 杜甫の戲題詩については、西本巖「杜甫における「戲題詩」一官定まりて後戯れに贈る詩について」『小尾博士退休記念中國文學論集』第一学習社 昭和五十一年三月が詳しい。
- 5) 『杜甫』高木正一（中公新書）昭和四十四年四月
- 6) 杜甫と元結・『篋中集』の詩人たち 伊藤正文『中國文學報』第十七冊 京都大學文學部中國語中國文學研究室 一九六二年十月
- 7) 『篋中集』一卷。唐の元結編。乾元三年（七六〇）の自序がある。同時代の沈千運・王季友・于逖・孟雲卿・張彪・趙微明・元季川（融）の七人の詩、二十四首を収録する。
- 8) 『唐才子傳』卷二にある。『唐才子傳』十卷。元の辛文房の著。成立年代不明。唐代詩人の伝記集。
- 9) 『元次山集』卷三所収。
- 10) 『篋中集』の「序」に「時乾元之三年也」とある。
- 11) 孟雲卿の詩は、『唐人選唐詩』（十種）上海古籍出版社 一九五八年十一月を底本にした。
- 12) 元結の詩文は、原則として『新校元次山集』（世界書局）中華民國五十三年二月を底本にした。
- 13) 前出6)
- 14) 「河嶽英靈集攷」中澤希男 群馬大学紀要第一卷 一九五〇年八月
- 15) 前出6)
- 16) 天寶十四載（七五五）作「戲簡鄭廣文虔兼呈蘇司業源明」『杜甫年譜』
- 17) 乾元元年（七五八）作「酬孟雲卿」（華州左遷に際しての作）『杜甫年譜』
- 18) 『資治通鑑』卷二百十五「唐紀 玄宗至道皇帝」天寶六載丁亥の条に「上欲廣天下之士、命通一藝以上皆詣京師、李林甫恐草野之士、（中略）、至者皆試以詩賦論遂無一人及第 者、林甫乃上表賀野無遺賢」とある。
- 19) 『新唐書』卷一百二十二「韋陟傳」に「帝令陟與崔光遠顏真卿按之陟奏言雖狂不失諫臣體」とある。
- 20) 『新唐書』卷二百二「文藝中 蘇源明傳」
- 21) 「容州都督兼御史中丞本管經略使元君墓誌銘」『魯公文集』卷四
- 22) 「大唐中興頌并序」『元次山集』卷七。なお、書との関係については、外山軍治『顏真卿一剛直の生涯』創元社 昭和三十一年十一月を参照。
- 23) 「唐代古文運動の形成過程」林田愼之助『中國中世文學評論史』第六章第二節所収 創文社 昭和五十四年二月
- 24) ・顏真卿は、安祿山の乱に際し、刺史として賊軍討伐に赫赫たる武功をたて、憲部尚書を賜った。
・蘇源明は、肅宗のもとで、考功郎中知制誥の職にあり、乾元二年（七五九）史思明が洛陽を陥れようとしたとき、遷都を考えた肅宗に対し、極諫をもって思いとどまらせるなど、適切な諫言を行い、元結など有能な人物を集めた。
・元結は、蘇源明の推薦により、肅宗のもとに召し出された。「乾元二年、李光弼、史思明を河陽に拒む。肅宗河東に幸せむと欲せしに、君に謀畧の有るを聞き、虚懐して召問す。君悉く兵勢を陳べ、時議三篇を獻ず。上大いに悦びて曰く、卿果たして朕が憂を破ると、遂に停る」（『魯公文集』卷四）とあるように、その功によって、金吾兵曹參軍事（正八品下）に抜擢され、義兵を募り、史思明の軍の南方進入を防ぐなどめざましい活躍をし、後水部員外郎兼殿中持御史（從六品上）に進んでいる。

- 25) 前出6)
 26) 秦州における杜甫—五言律詩多作の動機 安東俊六 『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』 龍溪書舎 昭和四十九年十月
 27) 「秋興八首」に表れる孤立感 川北泰彦 中国文芸座談会ノート十四号 九州大学中国文学研究会 昭和三十八年十二月
 28) 夔州における杜甫「拗体七律」の試み 富山敦史 奈良教育大学国文(35) 二〇一二年三月
 29) 杜甫「可歎」考 富山敦史 奈良教育大学国文(30) 二〇〇七年三月
 30) 杜甫と郎官—詩人の自覚と足搔き— 富山敦史 和漢語文研究(9) 京都府立大学 二〇一一年十一月

杜甫「三吏三別」

●「新安吏」	●「潼關吏」	●「石壕吏」
01 客行新安道	01 士卒何草草	01 暮投石壕村
02 喧呼聞點兵	02 築城潼關道	02 有吏夜捉人
03 借問新安吏	03 大城鐵不如	03 老翁踰牆走
04 縣小更無丁	04 小城萬丈餘	04 老婦出門看
05 府帖昨夜下	05 借問潼關吏	05 吏呼一何怒
06 次選中男行	06 修關還備胡	06 婦啼一何苦
07 中男絕短小	07 要我下馬行	07 聽婦前致詞
08 何以守王城	08 爲我指山隅	08 三男鄴城戍
09 肥男有母送	09 連雲列戰格	09 一男附書致
10 瘦男獨伶俜	10 飛鳥不能踰	10 二男新戰死
11 白水暮東流	11 胡來但自守	11 存者且偷生
12 青山猶哭聲	12 豈復憂西都	12 死者長已矣
13 莫自使眼枯	13 丈人視要處	13 室中更無人
14 收汝淚縱橫	14 窄狹容單車	14 惟有乳下孫
15 眼枯即見骨	15 艱難奮長戟	15 有孫母未去
16 天地終無情	16 千古用一夫	16 出入無完裙
17 我軍取相州	17 哀哉桃林戰	17 老嫗力雖衰
18 日夕望其平	18 百萬化為魚	18 請從吏夜歸
19 豈意賊難料	19 請囑防關將	19 急應河陽役
20 歸軍星散營	20 慎勿學哥舒	20 猶得備晨炊
21 就糧近故壘		21 夜久語聲絕
22 練卒依舊京		22 如聞泣幽咽
23 掘壕不到水		23 天明登前途
24 牧馬役亦輕		24 獨與老翁別
25 況乃王師順		
26 撫養甚分明		
27 送行勿泣血		
28 僕射如父兄		

追記

現行の学習指導要領では「伝統的な言語文化」の指導が強調されている。私は古典教育の推進にあたって、どうすれば児童・生徒に古典への憧れを喚起できるかをテーマに長年、試行錯誤を続けてきた。学校教育における古典の指導は、単なる事項の指導にとどまることなく、児童・生徒に人生の糧となる古典に出会わせる機会を提供することを念頭にすすめることが肝要だと考える。その前提としての古典の教材研究の方法については、単なる指導書の記述に留まらない原典追究の方法論を教員が持つことが重要だと考える。確かに現場は多忙であるが、直接的に児童・生徒の教育に関わる現場教員、特に若手教員が、原典となる古典作品そのものに深く切り込む姿勢が大切だと考え本稿を執筆した。教師自身が魂を揺さぶられた「私の古典」を子どもたちと語り合いたいものである。

●「新婚別」	●「垂老別」	●「無家別」
01 兔絲附蓬麻	01 四郊不寧靜	01 寂寞天寶後
02 引蔓故不長	02 垂老不得安	02 園廬但蒿藜
03 嫁女與征夫	03 子孫陣亡盡	03 我里百餘家
04 不如棄路旁	04 焉用身獨完	04 世亂各東西
05 結髮爲妻子	05 投杖出門去	05 存者無消息
06 席不煖君床	06 同行爲辛酸	06 死者爲塵泥
07 暮婚晨告別	07 幸有牙齒存	07 賤子因陣敗
08 無乃太匆忙	08 所悲骨髓乾	08 歸來尋舊蹊
09 君行雖不遠	09 男兒既介冑	09 久行見空巷
10 守邊赴河陽	10 長揖別上官	10 日瘦氣慘悽
11 妾身未分明	11 老妻臥路啼	11 但對狐與狸
12 何以拜姑嫜	12 歲暮衣裳單	12 豎毛怒我啼
13 父母養我時	13 孰知是死別	13 四鄰何所有
14 日夜令我藏	14 且復傷我寒	14 一二老寡妻
15 生女有所歸	15 此去必不歸	15 宿鳥戀本枝
16 雞狗亦得將	16 還聞勸加餐	16 安辭且窮棲
17 君今往死地	17 土門壁甚堅	17 方春獨荷鋤
18 沈痛迫中腸	18 杏園度亦難	18 日暮還灌畦
19 誓欲隨君去	19 勢異鄴城下	19 縣吏知我至
20 形勢反蒼黃	20 縱死時猶寬	20 召令習鼓鞀
21 勿爲新婚念	21 人生有離合	21 雖從本州役
22 努力事戎行	22 豈擇衰老端	22 內顧無所攜
23 婦人在軍中	23 憶昔少壯日	23 近行止一身
24 兵氣恐不揚	24 遲回竟長歎	24 遠去終轉迷
25 自嗟貧家女	25 萬國盡征戍	25 家鄉既盪盡
26 久致羅襦裳	26 烽火被岡巒	26 遠近理亦齊
27 羅襦不復施	27 積屍草木腥	27 永痛長病母
28 對君洗紅妝	28 流血川原丹	28 五年委溝谿
29 仰視百鳥飛	29 何鄉爲樂土	29 生我不得力
30 大小必雙翔	30 安敢尚盤桓	30 終身兩酸嘶
31 人事多錯迕	31 棄絕蓬室居	31 人生無家別
32 與君永相望	32 塌然摧肺肝	32 何以爲蒸藜